

お手紙の紹介

本年度百歳の表彰をさせていただいた香南市の門脇 幸江様より、8月15日にお礼のお手紙を頂戴しました。

戦没者の妻となられた門脇様の貴重な当時の記憶、そして現在の想いを、ぜひ会員の皆様と次世代を担う方々にもお伝えしたいと思い、了承を得て、ご紹介いたします。



拝啓、猛暑も少しやわらいで朝夕秋の気配を感じる候となりました。

遺族会の皆様ますますご清祥のこととおよろこび申し上げます。

この度は存じがけもなく百歳の祝いとして賞状及び記念のお品をお送りくださいます本当にありがとうございました。本当にありがたく、あらためてこんなにもお氣をつかす下さるお方がおられるのかと老婆の心が引き締まりました。厚く御礼申し上げます。

思えば遠い昔となりました。

昭和二十年八月十五日、昭和天皇の悲壮なお声で終敗戦を告げられるのを聞いた時、夫の留守中に生まれた小さな女の子をだきしめ、戦の終わった安堵と敗戦の悲しさに涙したあの日から早くも七十六年もの歳月が流れました。

やがて生き残った兵士たちが帰って来はじめました。今日は今日とは待ちに待った夫は、吹けば飛ぶような一枚の戦死の公報の白紙となって帰って来ました。

一歳にも満たない女の児とついに戦争後家となったこの身、まだまだ若い花の二十三歳の秋でした。

名誉の戦死とたたえられ、人前では泣くことすら出来なかつたこの日から、それこそ耐えがたきを耐え忍びがたきを忍びつつ生きんがために働きぬいた人生。

たとえ敗れたりとはいえ元日本帝国軍人の妻、祖国の礎となつた夫の名誉をきずつけてはならぬ、父を知らぬ遺児を育て、まがりなりにも家系を守り、節度を守り、我ながら強く咲いたなでしこの花も、今や葉もくきも枯れ果てて窓辺の老婆となりました。

遺族会のおかげ様で亡き夫の年金も毎年ありがたく、窓辺に腰かけて鳥とかたらい行く雲を眺めながらゆつたりと余生を送らしてもらっております。

会長様はじめ会員の皆様方、どうかこれからもお体にお気をつけられて世界平和のため戦争の無い日本が永久につづいていきますよう、遺族会の存続とご発展を心からお祈り致しまして粗筆もはぢずお礼のご挨拶まで申し上げます。
本当にどうもありがとうございました。

敬具

終戦の日です。八月十五日
良き終わりとなりそうです。

門脇 幸江

九十九歳と八ヶ月

大石会長様
み前に